

居ない此等諸國の史蹟は殆んど何物をも知り得ないものであることは、更めていふ迄もない次第である。こゝに於いて從來東洋史の研究に従事した西洋の諸學者で有名な人々は、揃ひも揃つて支那の歴史、殊にその外國傳、もしくは旅行記の類を、それ／＼の國語に翻譯したもので、支那に来て居た宣教師等はいふに及ばず専門の學者縱令ば佛蘭西のレミユザー (Rémusat) とかジュリアン (Julien) とか、獨逸のクラプロート (Klaproth) とかいふ人をはじめ、今日の學者も尙同様の事に従事して居る、たゞ後の人々は前の人の翻譯を訂正し、或は前の人の仕殘したものを續々譯出して居るのである、尤も一概に翻譯といふても十九世紀の半頃迄は主として譯述に止つて居つたが、漸次後になるに従つて種々考證を施し、それも益々密かになつて來て、現今の佛蘭西のシャヴンヌ (Chavannes) 氏や、ペリオ氏 (Peliot) 獨逸の Hirth 氏の如き精細を極める有様になつたのである、併しながら此等の漢史の中に小器用に書き付けてある此等の記事は、たゞ一部一分を照らす炬火であつて、未だ全般の光景を映じ出すに足る日光の如きものではないのである、換言すれば極めて粗漏で且つ誤謬に富んで居るものである、試みに一例を舉げて見れば、唐の玄宗皇帝が突厥の闕特勤 (Kül tegin) の紀功碑をその根據地なる蒙古のオルコン河流域の地に建て、それが今日に傳はつて居るのであるが、漢文はその一面丈けで、爾餘の三面には突厥文字で此の人の戦功が書き付けてある、西洋の學者が辛苦を重ねてこれを讀解した結果によると、闕特勤はその四十七歳の生涯の中には、二度までもシル河を越えて今の露領中央亞細亞に侵入して居る、また突厥について蒙古の地に據つた回鶻でも、或る可汗はやはり軍を率ゐてシル河地方まで進んだことが、その毗伽可汗 (bilgä qayan) の碑文に記されてある、蒙古と中央亞細亞とは地理上甚だ懸隔して居るのみならず、途には大山沙磧などの難所があつて、行軍の如き